

国際ロータリー第 2500 地区第 6 分區

帯広東ロータリークラブ会報



ROTARY
SERVING
HUMANITY

2016-2017 年度
帯広東ロータリークラブ

会 長 高 田 進
幹 事 石 川 博 機
メディア委員長 上 野 敏 郎

「**活**：かつ」

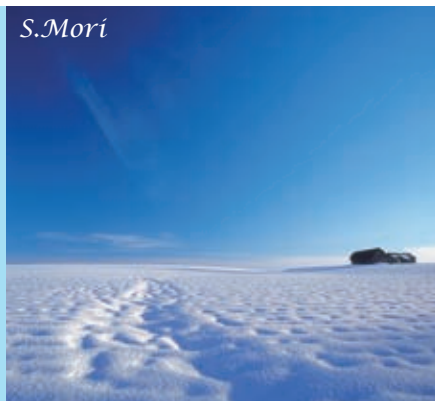
第1546回例会

平成28年12月13日(火) 於 ホテル日航ノースランド帯広

■創 立：1984年6月15日 ■認証：1984年6月18日 ■例会：毎週火曜日 12:30～13:30

■事務局：帯広市西3条南9丁目 帯広経済センタービル4F Tel.0155-25-7347 ■会場：ホテル日航ノースランド帯広

S.Mori



2016-2017 年度 国際ロータリーテーマ

【人類に奉仕するロータリー】

2016-2017 年度国際ロータリー会長

ジョンF・ジャーム

ガバナーテーマ

【ロータリーの明日の為に、積極的に行動しよう】

国際ロータリー第 2500 地区 ガバナー

駒 形 曙 美

月間テーマ

【疫 病 予 防 と 治 療 月 間】

◎起 立

加藤昭治 副SAA

◎友情の握手

加藤昭治 副SAA

◎点 鐘

高田 進 会 長

◎開 会 宣 言

加藤昭治 副SAA

◎国 歌 斉 唱

ロータリーソング 「奉仕の理想」

◎ゲスト紹介

高田 進 会 長

北海道帯広養護学校 校長 千葉紀行 様

◎会 食

会長挨拶

高田 進 会長



皆さん、こんにちは。

年内の例会も、今日を含め、三回となりました。来週は恒例の年末家族会となります。古川親睦委員長はじめ、委員の方々には、知恵を絞り、綿密な計画の下、ご苦労かけている事と思いますがよろ

しくお願いします。

当年度も半年がすぎますが、入院等、大事な時に、大変ご迷惑をおかけした半年でした。この会長挨拶もなれない中、上野前会長の会報を読み返したりロータリーの雑誌を読んだりし結構私なりに苦心しました。

多分、歴代の会長も、毎週何がテーマになりそうか、悩んだり苦労したのではないかと思います。

私も、テーマさえ決めれば、今はネットをはじめ、新聞、雑誌など資料は山ほどあります。しかし、資料を集めても、結局何が言いたいのか、毎週何がテーマになり

そうか、だからどうしろというのか、自分の中で展開と結論を出さないとなりません。

ようは、テーマに沿った資料を集め、自論としてまとめ上げる事が、必要かと思います。誰かをまねたり、下手な笑いを取ろうとすると、多分、滑って大恥をかくことになりそうな気がします。なので、むりをせず、回数を重ねて慣れていけば良いのではとも思っています。

考えてみると、会長挨拶などという、僭越なことを、70歳近くなって、似たような経験もない中、やっているわけで、正直、臆する気持ちがあります。

ロータリーは修行の場ともいわれています。しかし、一方ではロータリーを楽しもうとも言っています。

矛盾した言い回しにも聞こえますが、緊張や緩和に偏らないように、バランスをとっているのではないかと思います。

なので、そういう認識で、後、半年何とか続けていきたいと思いますので宜しくお願いします。

会務報告

石川博機 幹事

◎帯広東 R C 年末家族会(夜間例会)開催のご案内

日時：平成28年12月20日(火)午後6時30分

場所：ホテル日航ノースランド帯広

◎帯広東 R C 平成29年1月3日(火)は休会と致します。

◎帯広東 R C 新年交礼会(夜間例会)開催のご案内

日時：平成29年1月10日(火)午後6時30分

場所：ホテル日航ノースランド帯広

慶 祝

高田 進 会長

お祝いをさし上げたいと思います。

住宅新築をされた加藤武志会員おめでとうございます。

ニコニコ献金

親睦活動委員会 加藤 肇 委員

●高田会長 当年度も半年が過ぎようとしています。次週は年末家族会です。宜しくお願いします。

●鎌田副会長 誕生日に記念品を頂き有難うございました。

●泉会員 来年こそ今年の様にならず、良好な天候に恵まれ良い年となる事を祈念してニコニコをします。

●馬淵会員 今年もふるさと納税で静岡県西伊豆町より、大きな伊勢エビが数尾送られて来ました。

●上野会員 昨日、12月12日は、晩成社の依田勉三の命



日でした。今日の帯広を思いつつ感謝のニコニコをします。

- 加藤(武) 会員 池田町から帯広へ引越して約1ヶ月過ぎました。通勤が大変楽です。

出席報告

出席・プログラム委員会 宮前 克則 委員

1544回11月22日、計算に用いる会員数31名、本クラブ出席21名、メイキャップ4名、出席率が80.6%

11月の4回の合計が出席率が80.6%

本日12月13日は23名の出席でございます。

プログラム

社会奉仕委員会

【特別支援教育の現状】

北海道帯広養護学校 校長 千葉 紀行 様

帯広養護学校は西帯広の方にあります、出来上がった時には周りに住宅がほとんど無かったと記憶しています。養護教育が54年に義務化される1年前の昭和53年に開校しております。それはそういう学校を少しずつ整備しようという中の1番始めの学校だったのです。来年で丁度40年目になります。



開校の時は小学部と中学部だけでした、現在は高等部まであります。高等部ができたのも平成10年で18年目になります。三学部あり学校が一つ屋根の下に3つあるようなものです。そこに205名の子どもが今通学しております。家から通う子もいれば、校区は十勝全域ですのでいろいろ遠くからも来ています、寄宿舎も利用されてます。そういう子ども達が205名おります。あと訪問拒否といまして、なかなか学校に通えない障がいをもった方とか病氣的に難しい方とか、こちらから出向いて行って行う教育も週3日行ってますが、訪問教育ということで帯広病院の方に訪問していったりとか、自宅に出向いていったりとか、その様な形で現在にいたっているところです。

昭和53年スタートですので皆さん養護学校ってどうでしょう？歴史的には非常に浅いといえば浅いのですよ。通常の教育がかなり100年以上のありますので、そういう面では非常に若い部分があります。それだけに私たち始めに携わったもの達がよく言われたのは、今は礎を作っていると言われまして。なかなか普段なじみがない所かと思うのですが、そういう子ども達が教育を受ける権利を有したという面では非常に画期的な事だったのではないかと思います。

一方で私も経験があるのですが、私がいた小学校の中に学級にそういう特別な教えが必要なお子さんが何人かいらちゃって、養護学校が出来たことと特殊学校が出来たことで意外と通常の学級の中にそういうお子さんを知る機会を減ったことも事実です。

そういう流れの中で特別支援教育という考え方が生まれてきたと抑えていただければと思います。言葉ですので、これは養護といいながらも法律上で決まっている言葉なのです。それまで養護学校と言ったものが特別支援学

校という言葉に変わったり、特殊学級が特別支援学級に変わったりだとかいうふうな言い方になったのは大体20世紀が終わる頃ですね、21世紀にかけてこの特別支援教育の理念が随分盛んに使われるようになりました。

お手元にあります資料を上野先生が用意して頂きました。ありがとうございます。

その資料にもありますが、どういうお子さん達が通常の学校にいるのかということで、この話が出たときには、養護学校もできて20年以上たってますので意外と教育を受けるという面ではどの学校にもそういうお子さんがいるということは確かなのですが、それまで特別支援学校とか教育の中で語られるお子さんは障がい重たいお子さんでした。そこに上がってくる数字のお子さんは、今よく世間でもテレビでも出ますけど発達障害のお子さん。例えば学習障害とかの言葉はお聞きになった事はあると思いますが、注意欠陥多動性障害だとかそういうような、それまでなかなか解明できなかった脳の機能障害なのですけど、そういうものをもったその子のせいではないのですけど普通の生活の中でいろんな支援が必要だということ。お子さん達が調査をすると、よくありましたよね学級の中で立ち上がるお子さんがいるだとか、中々先生とコミュニケーションがうまく取れないお子さんだとか、そういうお子さん達がいわゆるそれだけのパーセンテージいるのではないかとということが調査として分かったわけです。**500人いる学校では30人位はそういう対象のお子さんがいるだろうという調査結果です。**確実にどの学校でもいるとは限りませんが割合としてそういうお子さんがいらっしゃるということと、そういうお子さん達がそれまでは学習が遅れてるお子さんだとか中々そういうことを、本来的な脳の機能障害であることを理解をしてもらえなかった、という面では2回目の教育的な改革を迎えてこういうお子さん達に光が当たったと。ただ、ここでそれまでであった障がい児教育という言葉が特別支援教育という言葉に変わっていきます。

特別支援教育の理念は、皆さんご存じかと思いますが、幼児児童生徒ひとり一人の教育的ニーズを把握し幼稚園から高等学校に渡って行われるものだというふうに定義されていますし、それはたんに障がい児をどう支援するとか学ばせるとかでなくて障がいをもった一つの個性として特別なニーズを持つ子どもが年齢と共に成長発達していくかということが、一つの提言にあっているいろいろな教育の形が作られるということなのです。

私は養護学校に務めて長かったものですから、障がいがあることイコールその子達が機能的にそういうものを持っているということについて把握はしていたのですが、通常の学校にどれだけのそういうお子さんがいるのかとは調査によって私たちは教えられました。その子達はわりとお客さんのような扱いを受けることもあったでしょうし、誤解を受けたこともあろうと思うのです。知的な遅れはほとんどありませんので、勉強は出来るのにどうして友達との関係が上手く行かないのか、先生が教えている間に立ち上がったり自分勝手な行動をどうしてするのか、そういうこといわれている。でもそれはよくよくその子ども達の実態を見ると機能的な問題で中々落ち着いた

い特徴を持っていたり、それから遅れがなくても学習障がいであれば字じたいが読めないのだけど数字だったら大丈夫、ほんとにちょっと偏った部分も含めてそういう特徴のあるお子さん達を、不思議な子というかたちだったのがある程度定義付けられた部分があるのです。その子達の才能だとかそういうものについて目が向けられる様になりました。

ですから一つひとつはそうやって科学の力もあるので、こういう教育が定着していったらそういう子達への偏見だとか誤解だとかを解かれてきているのではないかと思います。

ただ特別支援教育という言葉を使い始めたのが21世紀になってからですのでまだ18年程です。この言葉を使うと特別というのは特別なのかと聞かれるのですが実際そっちの特別というよりは、いろいろな支援をするニーズが沢山あるのだということなのです。なかなかこの辺は皆さんだと起業されてる方も多いと思いますし、そこに就労されている方にもコミュニケーション上手いかないか最近ではよく大人の発達障害という言葉が聞きますけど、そういう方を頭に思い浮かべられる方もいると思います。ただその方たちは基本的に先ほどいったとおり、知的な遅れがあるわけではないので、物を覚えたりだとかそれから技術を身につけたりだとか逆に得意な方も沢山います。ただやはりこういうやり取りですとか空気を読むだとか、そういうことが中々不得手の方が多くですね。ただそういう人達にも教育の機会がきちんと与えられることによって、社会性を身に付けたりだとかそういうお子さん達が大人なるにしたがって働く意欲をもつだとか、そういうことが大切だということではゆる特別支援教育というものが、だんだん言葉だけじゃ無くて理念だけじゃ無くて、現実のものとして今スタートして8年経ったというふうに押さえていただければと思います。

実際資料には帯広市の各中学校小学校の数と子ども達の数が出ていますけど、十勝には特別支援学校ということで本校もそうですが、中札内の高等養護学校、それから帯広聾学校、帯広盲学校、中札内の高等養護学校の分校ということで幕別高校に分校が一つあります。それとこの4月から新得高校が3年後に閉校ということでその1年生からということで新得高等支援学校を今スタートしています。ですから今十勝には5校の特別支援学校があります、ただ法律上は特別支援学校と名乗ってもいいし養護学校といってもいいしとなっているのでちょっとややこしいのですが基本的には特別支援教育という学校教育の中にある用語が私たちの学校が成立される元になっております。ですから本当はうちの学校も例えば帯広支援学校といってもいいのですが、実際それまで使ってたものの使い分けも難しいとのことで古い学校については帯広養護学校あるいは中札内高等養護学校といういい方をします。あと高等支援学校という面では先ほどいいました今年4月から出来ました新得につきましては高等支援学校といういい方をします。ここでみんな特別支援学校ていうんだとよくいわれてまして、聾学校・盲学校ていっておきながら、特別支援学校なんだねとい

われるのです。これは何故特別支援学校という話になっていったかという、本来はたとえば聴覚の障がいがあったり視覚の障がいがあったり、そういう障がいがあるお子さん達には特別な専門性のある教育とか訓練だとかを行うのですがそういう学校も基本的には特別なニーズのあるお子さんに関わるという意味合いでそういういい方をさせてもらってます。ただ障がいという面では、知的な障害もあればいわゆる身体の虚弱だとかそれから視覚障がい聴覚障がい分かれはするのですが、それを扱っている養護学校は基本的に特別支援学校というくりの中に入れて、養護学校からノウハウを各小学校や中学校に高校・幼稚園も含めて提供するというような意味合いでそういうような名称に変わってきています。

通常の学校にも何パーセントかそういうお子さんが存在し、そして養護学校にさらに障がいをもったお子さんが通っていると、どちらかというと養護学校は十勝もそうなのですが、5校ですのでこれを拠点方式といってそこに皆さん集まって下さいという形をとってます。教育の理念としては、まずそういうことをするということが先決だったのでから40年前に出来ましたのですが、本来であれば自分に校区ですとか近くの学校に通えるようなシステムも一方で必要なのかもしれません。ただ中々そこまで整備されていませんけど本校には十勝全域から知的障害のお子さんそれと肢体不自由のお子さんという方達が主に在学し通ってる形です。そして目の不自由のお子さんとか耳の不自由なお子さんについては聾学校・盲学校を利用してもらってます。聾学校・盲学校は実はもっと校区が広くて十勝だけでなく北海道を半分に分けると東側一帯が全部校区になります。札幌のほうにある聾学校・盲学校は西側全部ということで全道でもそれほど数はありませんので道南は道南でと言う事です。そのように拠点が決められていて教育は保証されているけどいろんな部分での課題は沢山あるかなと思います。

皆さんの通われていた学校及び近くの学校にもそういう理念を大切にしたい特別支援学級が出来たりだとか、そういうことを勉強するためにコーディネーターというか先生何だけどそれを中心にやっていく人が配置されたりとか、そういうような形で10年20年前とは随分今は学校もそういう面では機能が変わってきています。

通常の学校における教育ももちろん大切な部分ではありますが、それだけ特別な支援が必要なお子さん達への教育内容をやって行くときには特別支援学級は研究されていく必要がありますし、一方でそういう子ども達に関わるということは通常の学校の通常のお子さんについてもやはりこういうノウハウが活かされていくのではないかと一つ一つの理念です。

十勝の一つの特徴なのですが十勝には高校があります、この高校の進学率、少子高齢化という関係でドンドン統廃合は進んです。これは十勝においても同じです、ただ十勝は他の地域と違うのは高校においても特別選択教育が行われていて専門性をもつ先生がいらしゃることです。ただ養護学校に通うようなお子さんが通常の高校に行くということは学力的なことでもいうと中々ハードルが高いのですが、一方でさっきいったように発

達障がい系のお子さん通常の学級にいくのはいろいろな課題があるのだけど、知的な遅れがなくてもやはり人との関係とか難しいお子さんとか、いわゆる特別支援学級にいるお子さんが十勝の各高校には進学をしているというデータはあります。そのことは逆に文部科学省は特別支援学級(特学)というのを小学校・中学校までは認めているのですけど、高校には設置されてないですよ、それは義務教育でないこととか義務教育を過ぎたあとの高校教育において適しているのかどうかとか、課題にあるのですから設置されてません。今十勝においてモデル校が3校あってそういう学級を設置するというよりも、そういう子達への教育をするためにはどんな工夫があるだろうかということで投げかけられている学校が3校ほどあります。全国で30校くらいしかありませんのでその内の3校が十勝に高校としてあるということは、やはりこの流れはそういう子達に対して非常に優しいといえますか課題意識をもって取り組んでいる地域なのではないかと思います。私もさっきいったように色々な所を回りましたが、高校の先生がそういうこと勉強している面では進んでいるという印象を受けてますし、実はあのここには校長会がありますけど、これは各地域にあります。十勝の一つの特徴は中学校と高校の校長会というのは合同で一緒に研修をする場があります。意外とありそうではないといいますが、市町村立の学校と道立の学校だけでも繋がっていくと行くという面では本来はそういう様な管理職の人が連携するということが大切だといわれてても意外と会を作るとするのは難しいのですがここは中学校・高校の校長会が何年も続いてます。そこに3年前から私どもの特別支援学校も入れさせてもらいました。ですから今中学校・高校・特別支援学校校長会というような仕組みの中で年1回の研修会だとか定例の運営会議だとかお互いの顔を見ながら子ども達の実態について、研修したりだとかそういうことを繋げていくということが出来ています。

このことは先ほどからお話ししています特別支援教育の理念という面でもそこそこリンクする部分でありますし、少なくとも日本における特別支援教育というのがこの後どんなふうになっていくのか、という縮図が十勝にあるのではないかと考えています。中々ことばが一般的なことばのようできて一般的でない私たちは普通に使っていますが、特別ということばから始まることばがありすぎなのですよ、特別支援教育・特別支援学校・特別支援に対する何らかの考え方、配慮とかいいかたをするのでただ私が務めた昭和54年の時は大学の講義も異常児教育ということばでした。ちょっと刺激的ですよ、それは私が初めて大学でそういう勉強習うときにそういう名称でしかも単位を取らなきゃならないのかと違和感がありました。さすがにこれは数年経ったら消滅しました。その後精神薄弱ということばが出てきています、これはみなさんどこかで聞いたことがあるかと思います。精神薄弱というのもどうなんだ。その後出てきたのが知的障がいとか視覚障がいとかということばです。それがいいかどうかは別にしても、それまで学校に行けない行ななくていいと猶予されてた子ども達が学校教育を受けるよ

うになったという面での一つのポイントと、そしてこれまで一般的には阻害されていた子ども達に光が当たってその子達の教育の保証をするということが当たり前のようになってきた、私も務めた頃の10年ぐらいは釧路養護学校ですけど、どこの施設ですかと聞かれたのですよ。学校とついてるのに養護という言葉に反応される方が多かったです。今はそういうことがだんだん普通に教育内容の中身までは分からないにしても通常の学年のお子さんが通ってるとこですよとかそういうふうに理解していただけるようになりました。

これは始まったところにはどうなるのだという思いでしたけど、今思うとそういう40年の歩みというのは一つの意味があるし、この間に20世紀から21世紀になったときのそれまでの障がい児という考え方が特に特別支援という形に変わってきたというのも一つの大きな流れだし転換点かなと思います。

今日こういうふうにお話する機会を得たことは、私にとってもこれ自体が革新的で、以前だとかいう所にお招きもいただけなかったでしょうし、皆さんにこのようなお話するという機会も無かったとおもいます。それは上野先生のおかげでもあるのですけど、いわゆる世の中で発達障がいとか特別支援教育とか、それに一昨日は自閉症のお子さんのNHKのスペシャル番組で少しやっていましたけど、ああいうことが普通に語れるようになってきて少しずつ誤解だとか誤解だけで無くその子達に教育を進めることで社会参加が十分可能になるんだということ、ただ特別な配慮が必要ですね、それを特別扱いと考えるかどうかそれを一つの配慮と考えるかという部分では非常に人の面持ちは違ってくると思います。ですからここでこういう機会を得ましたので皆さんにはそういう視点でこのことを見てほしいですし、社会で育てていただければ本当にありがたいなというふうに思います。

非常に限られた時間の中でのお話でありましたけど今日こういう機会を得ました私としても本当にありがたく思っています。ありがとうございました。

◎閉会宣言

加藤 昭治 副SAA

◎点 鐘

高田 進 会 長

次週プログラム

親睦活動委員会

12月20日(火) 「年末家族会」夜間例会



仲良きことは美しき哉

ベトナムのハロン湾クルーズの鎌田副会長夫妻